第９課　喪失の時

【暗唱聖句】

「そればかりか、わたしの主キリスト・イエスを知ることのあまりのすばらしさに、今では他の一切を損失とみています。キリストのゆえに、わたしはすべてを失いましたが、それらを塵あくたと見なしています。キリストを得（るためです）」フィリピ3：8

【日曜日・健康の喪失】

いつまでも長く健康でありたいと誰もが願っています。しかし、どんなに願っても、健康を喪失するときが必ずきます。不摂生な生活が病気の原因となることもありますが、それとは関係なしに健康が損なわれることもあります。また、自分自身の健康が喪失することもあれば、家族の場合もあります。

「会堂長の一人でヤイロという名の人が来て、イエスを見ると足もとにひれ伏して、しきりに願った。「わたしの幼い娘が死にそうです。どうか、おいでになって手を置いてやってください。そうすれば、娘は助かり、生きるでしょう。」マルコ5：22，23

ヤイロが娘の癒しをイエス様に懇願したように、聖書の中には家族の病気の癒しのためにイエス様に懇願している場面がたくさん出てきます。特に体力が弱い子どもは病気になりやすいのです。そのとき親はどれだけ心配し、必至になって神様に祈りを捧げることでしょう。しかし、詩篇の記者が「わたしの神よ、わたしの神よ、なぜわたしをお見捨てになるのか。なぜわたしを遠く離れ、救おうとせず、うめきも言葉も聞いてくださらないのか」（詩篇22：2）とあるように、祈りがすぐにはきかれず、まるで神様から見捨てられてしまったかのように感じることもしばしばです。確かに、病気は罪の結果生じたものです。だとするなら、病気は神様からの罰なのでしょうか。

しかし、また病気の苦しみの中で、ヨブは「あなたのことを耳にしておりました。しかし、今この目であなたを仰ぎ見ます」（ヨブ42：5）と言い、パウロはこの苦しみによって他者への思いやりが生まれ、他者を慰めることができると語っています。神様は意味もなく病気を許されることはありません。神様は愛のお方です。不安と忍耐、そして涙の祈りの中で、必ず神様はご自身を現わしてくださり、涙を喜びに変えてくださいます。

【月曜日・信頼の喪失】

長年にわたって良い人間関係を築いていたのが、突如崩れてしまうということがあります。裏切られるという辛い経験をすることもあるでしょう。きっかけは些細なことであっても、一度関係が壊れてしまうと、それを修復することは簡単ではありません。精神的にも大きなダメージを受けることになります。特に、家族や夫婦の信頼を失ったら、幸せも崩壊してしまうことでしょう。信頼関係を喪失したとき、聖書はどのように関係を修復したら良いと教えているのでしょうか。

「だから、神の力強い御手の下で自分を低くしなさい。そうすれば、かの時には高めていただけます。思い煩いは、何もかも神にお任せしなさい。神が、あなたがたのことを心にかけていてくださるからです」第一ペトロ5：6，7

人間関係が壊れていくとき、相手のほうに非があると思いたいものです。そうだったとしても、聖書は自分を低くすることを教えています。そして、相手を裁くのではなく、何もかもを神様に委ねることが教えられています。

「だから、主にいやしていただくために、罪を告白し合い、互いのために祈りなさい。正しい人の祈りは、大きな力があり、効果をもたらします」ヤコブ5：16

次に罪を告白しあい、許し合い、互いのために祈り合うことが教えられています。相手が許してくれなかったり、祈ってくれなかったりしたとしても、自分は相手をゆるし、相手のために祈ります。そのとき傷が癒されていきます。自分の中にも過ちがあった場合は、その過ちも許されていきます。

「もし人の過ちを赦すなら、あなたがたの天の父もあなたがたの過ちをお赦しになる。しかし、もし人を赦さないなら、あなたがたの父もあなたがたの過ちをお赦しにならない」マタイ6：14，15

人間関係が壊れてしまうことは辛いことですが、神様から赦されていることのほうがもっと辛いことです。自分が神様から赦されていることがわかれば、心に平安が訪れます。

【火曜日・つづき】

暴力の多くが家庭内で行われています。日本では子どもに対する親からの虐待や面倒を見ないネグレクト、夫から妻へのDVなどの問題が表面化してきています。聖書の中にも家庭内問題について描かれています。たとえば、兄たちからエジプトに売られてしまったヨセフの物語が出てきます。またダビデの子どものアムノンが異母妹のタマルを辱めるような物語も出てきます。聖書はこのような家族内に起こった醜い出来事を、隠すことなく描写しています。本来、一番安全で安らげる場所であるべき家庭が、恐ろしい場所となっているとすれば、いったいどこに安らぎがあるのでしょうか。このような家庭内で起こる様々な問題は、絶望的に見えますが、しかし、神様に祈り、神様が介入されるとき、劇的な変化が訪れます。

【水曜日・自由の喪失】

ある物事に依存し、それがないと身体的・精神的な平常を保てなくなる精神的な病気を依存症と言います。依存症が問題なのは、よくないとわかっていながら止めることができず、そのことによって自分も、周りのものも破壊しかねないことです。何が依存症を引き起こすのか、はっきりしたことはわかっていませんが、アルコール依存症のような物質に対するもの、インターネット依存症のように行為に対するもの、共依存のように人間関係に対するものなどがあります。ギャンブル依存症は５３６万人、アルコール依存症は１０９万人と推計されています。何かに依存していないと、生きられないとするなら、それはまるでそのものの奴隷のようです。つまり、自由を喪失しています。

「知らないのですか。あなたがたは、だれかに奴隷として従えば、その従っている人の奴隷となる。つまり、あなたがたは罪に仕える奴隷となって死に至るか、神に従順に仕える奴隷となって義に至るか、どちらかなのです」ローマ6：16

「むしろ、人はそれぞれ、自分自身の欲望に引かれ、唆されて、誘惑に陥るのです。そして、欲望ははらんで罪を生み、罪が熟して死を生みます」ヤコブ1：14，15

依存する対象が神様であれば何も問題はないのですが、神様以外のものに依存し心が奪われ、その奴隷状態にあるとするなら、それは罪となり、やがて死に至ります。罪とは神様以外のものに向かって的外れな生き方をすることだからです。では、どうしたらよいのでしょうか。心を神様に向けることです。神様の奴隷となることです。そうすれば、この世の依存対象から心が離れます。

【木曜日・命の喪失】

「最後の敵として、死が滅ぼされます」第一コリ15：26

人間は罪の結果として、誰でも死がやってきて、命を喪失するときが来ます。しかし誰も勝てないかのように思える死に対して、聖書は「最後の敵として、死が滅ぼされます」と断言しています。愛する者の死に直面したとき、ショックと悲しみに襲われることでしょう。その喪失感ははかりしえません。喪失感が癒されるには、長い時間が必要です。しかし、聖書は死が滅ぼされると書かれてあります。つまり死んだ状態のままではなく、復活し、新しい命が始まることを教えています。神様を信じるものたちは、ここに希望があることを知っています。だから、悲しみの中にあっても希望を持ち続けることができるのです。少なくとも死者は復活までの間、安らかに眠っているのです。

「信じる者には、死は小事に過ぎない・・・クリスチャンにとって死は眠り、一瞬の沈黙と暗黒に過ぎない。生命はキリストと共に神の内に隠され、キリストの現れるときにキリストと共に栄光のうちに現れるであろう」希望への光P1092

人生には様々な喪失を味わう瞬間がありますが、どのようなものであったとしても、救い主なるイエス・キリストにより、慰めを受け、喪失感が癒され、希望が湧き上がる経験へと導かれていきます。